

幼児に基礎的な音楽表現力を指導できる保育者の養成を目指して

— 打楽器を用いて保育者養成校学生のリズム感を養う指導法 —

黒田紀子

Aiming for Excellent Education of Students at a Childcare Teacher Training School Learning Skills in Teaching Basic Music Expression to Young Children

— Instruction Method for Improving a Sense of Rhythm of Students at a Childcare Teacher Training School Using Percussion Instruments —

KURODA Noriko

キーワード：幼児、音楽表現力、打楽器、保育者
養成校、リズム感

I はじめに

音楽はリズム、旋律、和声の3つの要素から構成されている。その中のリズムについて芥川は、「リズムはあらゆる音楽の出発点であると同時に、あらゆる音楽を支配している。リズムは音楽を生み、リズムを喪失した音楽は死ぬ。この意味において、リズムは音楽の基礎であり、音楽の生命であり、音楽を超えた存在である。」⁽¹⁾と述べている。確かに、リズムは音楽の世界だけではなく、雨や風、鳥の声などの自然界や人間の声や動作など生活のあらゆるものに存在している。このことから、リズムが音楽を表現するための基盤であると言えるだろう。

II 背景

幼稚園教育要領や保育所保育指針は、その「表現」の領域で、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」⁽²⁾と記しており、幼児の表現活動を重視している。しかし、新山（2015）が「保育現場には『表現』領域の名

称は浸透したが、養成教育で保育者として『何を』『どのように』身に付けさせるのかについては、未だ議論を深める必要がある。」⁽³⁾と述べているように、保育者養成校（以下「養成校」と記す）における「表現」に関する教育・指導の方法は、未だ確立されていないのが現状である。

保育現場での様々な音楽表現活動の中では、歌うことが活動の基本となっている。現場の多くは「おはよう」「おかえり」などの生活の歌や童謡、わらべうたなどを活動の中に取り入れているが、これらの子どもの歌には、養成校の学生が苦手とする付点リズムが多く含まれている。幼児の音楽表現の基本となる歌唱指導を始め、より良い音楽教育を行うためには、保育者自身が音楽の基礎ともいえるリズムを正しく理解し、リズム感を養う必要があるだろう。

養成校の音楽の授業では、ピアノの基礎技能を学ぶとともに、ピアノの伴奏をしながら歌う「弾き歌い」の技能を習得するのが一般的である。ところが、学生たちの殆どはピアノ初級者であるため、扱い慣れていないピアノを用いてリズムを指導する方法は効率的であるとは言い難い。それ故、音楽表現の基盤ともいえるリズムの指導法を今一度見直す必要があるのではないだろうか。ピアノの弾き方を習得する前に、もしくは同時進行でリズムの指導を行うべきではないかと思われる。そ

ここで筆者は、学生たちに馴染みのある子どもの歌を例に挙げ、打楽器を用いてリズム感を養う指導法を検討した。

Ⅲ 目的

本研究は、養成校の学生のリズム感を向上させる指導法の提案を目的としている。学生たちに馴染みのある子どもの歌を例に挙げて、打楽器を用いるリズム指導法を検討した。

Ⅳ 指導法

ピアノの名教師として知られるジョゼフ・レヴィーンは、「リズムは体で感じとらなければならない。」⁽⁴⁾と述べているように、リズム感を養うには、学生にまずリズムを体感させ、身体に覚え込ませることが重要である。リズムの理論を理解するだけではリズム感を身につけることはできないのである。また、諸井らは「リズム感とは、『聞く』『うたう』『弾く』ことの外に、更に『おどる』『リズム合奏』を通して養われます。」「リズム感とは、単に耳だけでなく、身体を通して感受されるという特徴をもっていますので、音楽をきいて歩いたり、おどったりすることや、リズム楽器を打つことなどは、リズムを身体で感じ、身体で表現していることで、リズム感発達の上からも、大いに奨励したいところです。」⁽⁵⁾と述べていることから、打楽器を用いた合奏を通してリズ

ム感を養う指導法を提案することとした。

1. 使用教材と楽器

リズムの違いを学生に説明するための教材として、保育現場で使用されている子どもの歌の中から、「あんたがたどこさ」(譜例1)⁽⁶⁾と「かたつむり」(譜例2)⁽⁷⁾の2曲を取り上げる。「あんたがたどこさ」に用いられているリズム(♪♪)と「かたつむり」のリズム(♪♪♪)は、子どもの歌に多く使用されているにもかかわらず、これらのリズムを混同してしまう学生が多いからである。

通常、リズムの指導では、手始めに手拍子によるリズム打ちが行われることが多い。何人かがいくつかのパートに分かれて、パートごとに異なるリズムを同時に手拍子すると、それぞれのパートのリズムを聞き分けることが困難となる。そこで、パートごとのリズムの違いを音色によって聞き分け易くするため、身近な打楽器である「タンバリン」「カスタネット」「鈴」を用いることとした。これら3つの打楽器に共通する点は、手拍子に類似しており、手指の力加減による音のコントロールが容易なことである。また、学生たちが過去に一度は触れたことのある楽器であり、幼児にも演奏が平易である。

これらの打楽器を用いるリズム指導について以下説明していく。ただし、今回は曲目の内容や各打楽器の特徴・奏法についての説明は割愛する。

(譜例1)「あんたがたどこさ」



(譜例2)「かたつむり」



2. 指導するにあたって

指導者は、まず手本を見せてから学生に行わせることが大切である。「あんたがたどこさ」では、正しくリズム打ちすることに重きを置き、「かたつむり」では、打楽器や歌で感情を表現するなど、表現の多様性や可能性を体験させながら指導していく。パートごとに分かれ、学生同士が相互の様子を確認できるよう円陣を組むなど、向かい合わせになって行くと良いだろう。

3. 指導法

「あんたがたどこさ」と「かたつむり」を例に挙げて、それぞれの指導法を述べるとともに、指導のポイントも併せて述べていく。

あんたがたどこさ（譜例3）

まずはリズムを正確に打てることに重きを置いて行う。

- (1) 一通り歌う（譜例3①）
- (2) ①をカスタネットでもリズム打ちしながら歌う。
- (3) ②をカスタネットでもリズム打ちしながら歌う。
- (4) ③をタンバリンでもリズム打ちしながら歌う。
- (5) カスタネット（②）とタンバリン（③）の担当に分かれ、歌いながら合奏する。
- (6) ④を鈴でもリズム打ちしながら歌う。
- (7) 3つのパート（②③④）に分かれ、歌いながら合奏する。

（譜例3）「あんたがたどこさ」

あんたがたどこさ
(リズム感を養うための)

わらべうた
編曲：Noriko Kuroda

① 歌
あんたがた どこさ ひごさ ひがどこさ くまもとさ くまもと どこさ

④ 鈴

② カスタネット

③ タンバリン

8 歌
せんばさ せんば やまには たぬきがおってさ それをりょうしがてっぼうで

8 鈴

8 カスタネット

8 タンバリン

16 歌
うってさ にてさ やいてさ くてさ それを このはで ちよいかぶせ

16 鈴

16 カスタネット

16 タンバリン

<指導のポイント>

打楽器は打つ位置によって音色が異なることを最初に実践させたい。

- (1) 学生には手拍子でテンポを取りながら歌わせる。
- (2) まず2～4小節に区切りながら行い、最後に通して打てるようにする。
- (3) 四分休符の時に打たないようにすることと、その次の音のタイミングが曖昧にならないように注意する。
- (4) 全員の打点が揃うようにする。
- (5) 学生同士で相互の音とリズムをよく聴き合いながら行えるよう指導する。楽器の担当を交代して行う。
- (6) 安定したテンポで行う。
- (7) カスタネットと鈴、鈴とタンバリンのように、2つのパートで事前に合わせてから行っても良い。楽器の担当を交代しながら行う。この歌は歌詞に「さ」が何度も現れるのが特徴である。「さ」の部分で打つタンバ

リン担当の人は、楽器を構える位置を体の中央だけでなく、上下左右に移動させながら打つなどの工夫をして視覚的な面白みを出すと良いだろう。

かたつむり (譜例4)

2つのステップを踏んで、表現指導を加えながら行う。尚、[ステップ2]のピアノ伴奏は、簡易伴奏にアレンジした。

[ステップ1]

- (1) 譜例4の①をカスタネットでリズム打ちしながら歌う。
- (2) ②をタンバリンでリズム打ちしながら歌う。
- (3) カスタネットとタンバリンの担当に分かれて、歌いながら合奏する。
- (4) ①のリズムを用いて、タンバリンで喜怒哀楽などの感情を表現しながらリズム打ちをする。次に歌も加えて行う。

(譜例4)「かたつむり」

かたつむり
(リズム感を養うための)

文部省唱歌
編曲：Noriko Kuroda

♩ = 92

<指導のポイント>

- (1) 「あんたがたどこさ」のリズムと混同しないように、しっかりリズムを理解させる。

- (2) 2拍子の強拍・弱拍を意識しながら行うこと。指導者は手拍子などで拍を刻み、テンポを一定に保つようにする。

- (3) パートを交代して行う。相互の音やリズムをよく聴き合い、全体のバランスを整えることを重視し、適切なテンポを一定に保って行う。
- (4) 楽器を打つスピードや強さなどをコントロールして喜怒哀楽などの感情表現を実践する。まずは歌わないでタンバリンの音に集中して行うこと。次に歌も加えて感情表現をする。表現の面白さや多様性について体験させたい。ただし、表現することにより

リズムが乱れないよう注意する。

[ステップ2]

- (1) 譜例5の①鈴と②カスタネットの担当に分かれ、歌いながら合奏する。
- (2) ①鈴、②カスタネット、③タンバリンの担当に分かれ、歌いながら合奏する。
- (3) この曲に相応しい雰囲気や感情を、打楽器と歌の両方で表現しながら全パート（ピアノ伴奏付き）と合奏する。

(譜例5)「かたつむり」

かたつむり
(リズム感を養うための)

文部省唱歌
編曲:Noriko Kuroda

歌

1. でんでん むしむしか たつむり おまえの あたまは
2. でんでん むしむしか たつむり おまえの あたまは

鈴 ①

カスタネット ②

タンバリン ③

ピアノ

7

歌

どこにある つのだせ やりだせ あたまだせ

鈴

カスタネット

タンバリン

ピアノ

<指導のポイント>
ステップ1と同様に2拍子をよく感じて行うこ

と。指導者は手拍子などで拍を刻みながら指導すると良い。それぞれのパートを交代して行う。

- (1) 鈴とカスタネットは、相互の音やタイミングをよく聴き合って行う。鈴は柔らかい音色のため強拍部に相応しい明確な発音となるように、また、カスタネットのリズムは1拍目裏から始まるため、軽やかに演奏させたい。
- (2) 歌いながら行ってもリズムが崩れないよう注意する。リズムが乱れてしまう場合は、声には出さずに心の中で歌いながら行わせると、リズムと歌詞の組み合わせが客観的に聴きやすくなる。3つの打楽器と歌、すなわち4種類の音やリズムを聴き分けながら行えることを目指したい。全員の息が揃うよう、相互の表情を見ながら行わせると良いだろう。
- (3) この曲の雰囲気や感情を学生に考えさせ、表現することを実践する。楽しい雰囲気やかたつむりの動き、子供の好奇心などを表現できるよう導きたい。

V 考察

「あんたがたどこさ」(譜例3)では、歌のリズム担当(歌詞の「さ」の部分を除く)には、騒がしくならないよう軽やかな音のカスタネットを、拍ごとに打つ「拍子打ち」の担当には、カスタネットの音を邪魔しないよう柔らかい音色の鈴を、この歌の特徴である歌詞の「さ」の部分には、明確な音を出せるタンバリンをそれぞれ選択した。歌詞の「さ」の部分では、鈴とカスタネットを休符にすることで、タンバリンの音を聴き、次の小節に入るタイミングを意識的に考えるように構成している。コダーイが「休符はリズムの重要な要素であり、聴覚の訓練の最初から教える。これをしてしないと、リズムの正確さには絶対到達できないだろう。」⁽⁸⁾と述べているように、リズムを正しく理解し、リズム感を養うには休符を理解させることが重要である。

「かたつむり」のステップ1(譜例4)では、強拍・弱拍を意識して行えるよう、カスタネット

とタンバリンのみのシンプルな合奏とした。タンバリンは最初と最後の4小節では拍子打ちを、中間部の第5小節から第8小節では、拍を2分割して八分音符刻みで打っている。これにより「あんたがたどこさ」とのリズムの違いを理解しやすくするだけでなく、音価・拍・拍子・テンポを総合的に学べるようにしている。

「かたつむり」のステップ2(譜例5)では、歌のリズムを鈴とカスタネットで分担することで、リズムの正しい理解と同時に、聴く力を促している。また、分担することにより一定のテンポを保つことへ意識が向くため、リズム感の発達に繋がると考えられる。第5小節から第8小節では、タンバリンが拍を2分割することにより、より正確なリズム打ちが要求され、3つのパートを相互に聴き合う力を養えるようにした。また、2拍目の裏をタンバリンは八分休符、カスタネットは八分音符にすることで休符をしっかりと意識させ、なおかつ他の楽器の音を聴くことにより耳の訓練とリズム感の発達を促している。

指導する際はまずリズムを体感させ、身体に覚え込ませることを優先し、リズムの理論的な説明はここでは軽く留めると良いだろう。リズム感や拍子感覚、一定のテンポ感を身につけるには、拍子の強拍と弱拍を意識して行うことが大切である。リズムを理解するには、拍や拍子、音価などの総合的な理解が必要であり、今回の指導法によりこれらを学ぶことができるだろう。

リズムを正確に打てるようになったら、打楽器を打つスピードや強さをコントロールして、音で感情を表現することを是非実践させたい。この音による感情表現の指導を行わないと、単なる機械的なリズム打ち作業に終始してしまうことになるからである。音や歌で喜怒哀楽を表現してみると、個人個人で感じ方が異なることに気づかされ、表現の多様性や可能性、面白さを実感できるだろう。保育者の音楽的な感性や表現力が豊かになれば、幼児にも自然と良い影響をもたらす音楽に対する興味を促すことになるだろう。

合奏では、学生が互いの表情を見ながら、相互

の音やリズムをよく聴き合い、全体のバランスを整え、適切なテンポを一定に保って行うことが大切である。打楽器にはピアノを弾くような指一本一本を操る動作がないため、余裕を持って表現したり音楽を楽しんだりできるだろう。楽しく生き生きとした演奏になるよう指導することが望ましい。

合奏すると、相互の音やリズムを聴き合いながら、協力しあって全体のバランスを整えるなど、他者に気を配り思いやることになるので、協調性や共感性といった社会性の基礎を育てることに繋がると考えられる。また、音色の重なりを聴き分けられるよう意識を集中させることは耳の良い訓練となる。聴く力が向上すれば、感性が豊かになり音楽表現力を育てることに繋がるのである。合奏による音楽性や社会性の獲得は、養成校の学生だけでなく幼児に対しても同様であろう。

VI 結論

幼児の音楽表現力の基礎を育むためには、その担い手となる養成校の学生に、音楽表現の基盤となるリズムを正しく理解させ、リズム感を習得させることが重要である。ところが、養成校におけるリズムの基礎に関する従来の教育は、学生が苦手とするピアノを用いて行われることが多く、リズム学習が機械的なリズム打ちの訓練に終始してしまう傾向にあった。

学生の負担を軽減するだけでなく、さらに音色の違いを利用してリズムの違いを理解しやすくするための工夫として、身近な楽器であるタンバリン、カスタネット、鈴を用いたリズム指導法を考案した。この指導法は、3つの打楽器によるリズム打ちや合奏・合唱、打楽器や歌による感情表現の実践を通して、リズムを体感し表現する体験を重ね、リズム感を養っていく方法である。ただ、リズム感を養うには様々な音楽体験の積み重ねが重要であり、また、リズムの指導には多種多様な方法が考えられるため、今回の指導法は一提案として捉えていただきたい。

指導者にとって大切なことは、学生自身が養成校での学びを活かし発展させ、将来、保育者として現場の環境や幼児の発達段階に即した臨機応変な対応・教育ができるよう導くことである。今後も幼児教育の充実に繋がる指導を目指し、さらなる研究を重ねていきたい。

引用・参考文献

- (1) 芥川也寸志『音楽の基礎』岩波書店、1971年、p.88
- (2) 文部科学省『幼稚園教育要領』2017年
厚生労働省『保育所保育指針』2017年
- (3) 新山順子「保育者養成における人との関わりから展開する即興的な身体表現の実践」『兵庫教育大学大学院学校教育学博士論文』2015年、p.7
- (4) ジョゼフ・レヴィーン著、中村菊子訳『ピアノ奏法の基礎』全音楽譜出版社、1981年、p.9
- (5) 諸井三郎、酒田富治共著『保育のための音楽教育』恒星社厚生閣、1966年、p.167
- (6) 神原雅之、鈴木恵津子監修・編著『幼稚園教諭・保育士養成課程 幼児のための音楽教育』教育芸術社、2017年、p.124
- (7) 全国大学音楽教育学会編『明日へ歌い継ぐ 日本の子どもの歌—唱歌童謡 140年の歩み』音楽之友社、2016年、p.18
- (8) 中川弘一郎編訳『コダーイ・ゾルターンの教育思想と実践～生きた音楽の教育をめざして～』全音楽譜出版社、1980年、p.159

黒田紀子（埼玉東萌短期大学非常勤講師）

